

地域活性化を目指した地域文化の再生・継承と地域資源の活用研究

海と陸の関係を軸にしたアートの手法による活動

指導教員 金沢美術工芸大学 美術科 教授 中瀬康志

参加学生 尾崎太亮・仲駿輔・出倉誠一・岩田春菜・庄子陽子・津村晃希・上野春香・龍ヶ江耀介

1. 地域活動の概要

活動 A/ 旧上黒丸小中学校の再利用計画に添って、周辺の外部空間を活用したアートパーク化と空き教室を利用した展示空間化構想に基づいた活動

活動 B/ 奥能登珠洲市の代表的里山である上黒丸地区において、環日本海的視点から地域の特性を探り、特に循環する仕組みを取り入れた生き方に着目しながら、アートという表現媒体による地域交流と文化再生のイメージを探る為のフィールドワーク。特に今年度は舳倉島など、より広範囲な現地調査を行い来年度の具体的活動プラン作成の環境作りを行った。

2. 地域活動の具体的な内容

第一回作品運送と設置空間調査、整備活動 6月25日、26日

旧上黒丸小中学校の外部空間、周辺のフットパスによるアートパーク化、空き教室を利用した展示空間化構想に基づき、第1回目の作品の運送。地元地権者への挨拶、説明を行い、地元世話人のサポートもいただき、現地測量に基づき草刈りを敢行し設置計画、エリア構想の話し合いを行う。



第二回作品運送、搬入、地域活動協力 8月6日～10日

炎天下の中、市役所からも熱中症に注意の放送もあり過酷な作業ともなった。一方で、地元住民の方々との交流、信頼関係も構築でき、今後は、こうした作業にも日程調整を行いながら継続して参加、協力していくことを確認。また、今回の中心的な活動である屋外立体作品エリアの開拓、整備のために、さらに雑草の草刈りと整備を中心に行う。定期的な管理、維持が必要になることも視野に、作品設置の位置決めや作品をつなぐ経路（フットパス＝美の回廊）のデザイン計画も行う。また、借り受けた地主との契約に関しては、珠洲市役所が協力し、その書類制作、契約事項をまとめ安全対策を講じる旨、話し合いが行われた。



## 作品設置作業

現状復帰を考慮し地面掘り下げ，ブロックによる平面出しを行った上に作品台座の構造体を埋め込む。連日の炎天下に黙々と作業をする学生の集中力も素晴らしく、こうした現地の空間での作業は学生にとっても今後、美大研修センターとしての計画に添って実験的な場にしていく為の活動計画や、現地での木彫や立体アートを中心としたシンポジウムの開催などの可能性についても検討を行った。



## 海士町の海女さんへのインタビューとリサーチ 8月25日～29日

輪島、舳倉島を結ぶ1日1便のフェリーが欠航となり、沿岸で漁を行う海士の帰港を待ち、その状況と多くの海女さんの漁の様子を伺うと同時に漁港、市場にて漁に関するリサーチを行う。プロジェクトの重要なテーマである「海の人々、山の人々の関係」を調べるため、「海士」に焦点当て、その歴史を知る方々を追跡、インタビューと現地での生活状況等に関するリサーチを行った。

江戸期に福岡の鐘崎から移住してきた海女集団が起源であると伝えられている輪島海士町は、輪島崎にうもれた100メートル四方にも満たない小さな集落であるが、この集落の人々は50キロ沖合にある舳倉島に拠点を持ち、今でも海の民としての生業を営んでいるなど貴重なお話を伺うことができた。



## 鯨塚のリサーチ

奥能登、上黒丸アートプロジェクトに於ける「鯨」を象徴とした企画「鯨談義」のための鯨漁、展示構成使用計画の鯨頭骨等の確保と鯨漁に関わる情報収集を行う。

山の人々である上黒丸との魚の行商による物々交換の歴史を知る人も存命しており、その豊かな関係を知ることができた。



能登町・藤波地区の神目神社（かんのめ神社）の鯨頭骨

能登町、鯨漁に関わる資料収集

能登町 遠島山公園、羽根万象美術館にて「鯨捕りの絵馬」、鯨漁に使用された巨大な木造船である「胴船」などを視察。奥能登の鯨漁の生活に根ざした壮大な漁の様子を知る。現在も年間18頭も揚がるという鯨漁の説明、そして真脇遺跡に新設される鯨漁に関わる展示の建物への移動の計画などを伺う。



にわか祭り視察とよばれ参加

連日フェリー欠航のため、計画を変更し能登町 業関係者代表の方にインタビュー、来年度の企画への協力依頼と鯨漁について伺う。また、現地で行われていた「にわか祭り」に参加し、夜通し行われる祭りの状況を体験、取材し、企画アイデアについての意見交換を行う。



舢倉島リサーチ 8.29

滞在最終日にフェリー運行でやっと念願の調査、視察を行うことができた。大波のため多くの参加者が船酔い著しかったが、現地ではその島の美しさに押され予想以上に活発に行動できた。海女さんへの取材はNHKでのブームの礼儀ない取材攻勢で年配海女は警戒強く、私たちの想いを伝えることに苦労したが、区長さんの尽力もあり今後の関係の基盤を作ることができた。輪島からの距離感や海女漁の様子、そしてその変遷などインタビューを行うことができた。80すぎても海女をしていると言うと驚くが、80すぎても畑仕事をしている人もいだろう。それと同じで、仕事ができなくなったら施設にでもはいるしかないが、腰が痛くても脚が痛くても、海に入るとふわっと浮いて、そんな痛みが全部なくなる。「海は天国みたいだ」という最長齢80過ぎの海女の言葉が響いた。

奥能登、日本海文化、そして大陸へ、という視点でのプロジェクトの根幹を抑えるためにも、この島を知ることはあまりに重要であり貴重な体験であった。



#### 4. 来年度の地域活動計画

\*まずは今年度最終の冬のプルグラム「幻の山に登る」を敢行し、冬シーズンの持つ価値を継続して見える形で表現していく。来年度活動としては今までの4年間の活動をさらに継続、進展させて行く。具体的には屋外立体エリアへの実験的作品設置と室内空間への作品設置を展覧会という形で発信し、地域の方々との集中的な交流期間を設ける。また、今年度のリサーチによって得た体験、情報、関係から、海と陸の交易を「鯨」をキーワードに企画イベントを立ち上げる。

\*廃校小中学校の活用計画を展開し、この場を拠点として、周辺地域との関係をさらに深めるため、空き地、空き家の再利用に向けた企画を行う。加えて、来年度開催される奥能登国際芸術祭と連動し、廃校小中学校グラウンドを使用したプロジェクト「アートキャラバン KAMIKUROMARU」を実行する。これはアーティスト的な組み立て移動式の大規模な大型テントを中心に多くの人が集う場とプログラムによるプロジェクトで、こうした活動表現を起爆剤として地域での精神的なアクティビティをさらに高めていきたい。

#### 5. 学生の感想

\*大型作品3点を廃校小中学校（現在 / 上黒丸研修センター）その近隣の土地に設置した。野外への作品は、地主さんとの交渉の後に借り受け、草を刈り、地面に台座を埋めることで設置が完了した。今後は周囲の自然環境（主に竹林）と作品との関係をよりバランスの取れた状況に進化させたい。また、この活動で得られる経験は貴重であり、今年開催される奥能登国際芸術祭との繋がりがたも同時に考えていきたい。同時にこうした経験を通じて人同士の関係の広がりにも取り組んでいきたい。

\*私たちはこの過疎化が進むこの地域でアートを通してどのような事が出来るかの活動を長年にかけて模索してきた。最初は廃校の使われなくなった部屋や体育館などの空間を使い普段できない規模の作品を制作、発表を行った。活動の継続で規模の拡大したアートプロジェクトになっていった。学生でこのような表現活動に関われるのことはとても貴重である。珠洲市では金沢美大以外にもその場の土着的な文化を研究していくグループ、その地域の人々に飛び込み交流を作るグループなど多種多様な拠点として活発な活動が行われている。地域の人々も活動には協力的で、小さな村のコミュニティがどのようにできているのか、体感するような形で学ぶこともできた。活動の課題としては、同じ目的意識を持ってこのプロジェクトに入って来る学生が年々少なくなり、継続していく事への活気が弱くなってきていること。そしてプロジェクトの外側からではなく内側に立ってはいじめて、参加活動するための時間確保の問題や資金関係の現実的な問題も見えてきた。

#### 6. 地域活動に対する地域からの評価

\*一連の活動を通じて廃校小中学校の設備投資や補修が行われ環境が大きく改善した。

\*国際展への参加など、地域、世界、といったスケールでの交流の起点ができた。

\*最奥の地区の人々との関係にも積極的に取り組んでおり、その活動をさらに応援、招致したいという地区も増えており、また、今まではなかった地元飯田町など海の関係者との温かな交流プログラムなど新鮮な息吹が生まれている。

\*継続的な活動に向けた受け入れ側の組織体制が今後の課題であるが、地域のグループ、組織を活用しながら美大側と連動し協力していきたい。

\*アート表現の理解は難しいが、地域活動への参加や奉仕活動（竹林の整備や草刈り）など、地域住民との人間交流によって逆にアートというものへの理解が深まっている。

\*過疎化著しく高齢化した集落であり、その意味で、活動のサポート、協力が負担とならないことは前提であり、できれば木工や陶芸、農業といった具体的な生産に関わりチャレンジする若い世代の定住があることを期待したい。